

自己評価表

愛媛県立今治西高等学校伯方分校
学校番号 14.1

教育方針	地域に根ざし、個々の生徒に応じた教育を目指し、勤労と責任を重んじ、人間性の涵養に努め、豊かな文化の創造と発展に寄与することのできる心身ともに健全な人間を育てる。	重点努力目標	『にしき(忍耐・真剣・希望)を体現できる生徒の育成』 一個別指導の充実と主体性を育む教育活動の実践— 忍耐…風雪の道を歩み、自己をきたえる 真剣…探究の道を歩み、英知をみがく 希望…理想をかかげ、未来をひらく
------	--	--------	--

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
魅力ある学校づくりの推進	魅力ある学校づくりの推進	地域や保護者の期待に対応しながら学校魅力化事業を推進することにより、「伯方分校に入学してよかった」と思う生徒100%を目指します。 A:100% B:90%以上 C:80%以上 D:79~60% E:59%以下	C	ここ3年、学年が進むにつれて満足度が低下する傾向が続いている。魅力化事業を含め全ての教育活動が生徒の成長を促すものになっているか、改めて検証する必要がある。 生徒:83%(保護者:90%)	生徒による授業評価を導入して授業改善を図るとともに、生徒に寄り添いながら、それぞれの資質・能力を高めていくための指導体制の見直しと充実化を図る。生徒の成長を促すための、こまめな情報共有を教職員間でしていく。
	教職員の資質・能力の向上	学校の教育目標や経営方針、生徒の活動状況等を、ホームページや学校通信等に掲載するなどして情報発信に努めます。	A	リニューアルしたホームページや「にしき通信」等の発行により、情報発信を十分に行うことができた。	目的を明確にした情報発信に努める。ホームページを定期的に更新し、内容の充実化に努める。伯高タイムズは止め、にしき通信に集約する。
	教職員の資質・能力の向上	校内外の研修の機会を確保しながら、教職員の資質・能力の向上による魅力化を図り、伯方分校入学者数の増加を目指します。	C	校内研修(ICT、人権等)の機会は定期的に確保されていたが、授業改善や専門性を高める校外研修への参加が十分とはいえなかった。	業務改善により校外研修への参加機会の確保に努める。生徒理解研修等を取り入れ、生徒が充実感や達成感を味わえる学校づくりに努める。
自ら学ぶ力と豊かな創造性	施設・設備の充実	施設・設備等の点検や情報の適正な管理に努め、保健指導や防災教育の充実化により、安全・安心な環境づくりに努めます。	C	定期的な安全点検や保健指導・防災教育の実施により安全・安心な教育環境が整備されている。情報管理に関する共通理解が不十分で課題が残った。	情報の重要性分類を含め、情報管理規定に関する共通理解の徹底を図る。防災教育等が形骸化することのないよう、生徒の主体的な取組を促す。
	家庭学習・自主学習等の充実	ICTの活用や適切な課題の提供により、家庭学習の充実を図り、1日3時間以上学習する生徒69名(80%)以上を目指します。 A:69名以上 B:68~60名 C:59~43名 D:42~35名 E:34名以下	C	長期休業前には、教科間で調整を図り、生徒に適切な量の課題を提供することができた。日々の課題については、学習意欲の喚起につながる工夫を行うことができなかった。3時間以上の生徒:48名(57%)	校内外の研修機会を活用しながら授業改善に取り組むとともに、きめ細やかな声かけや個別指導、課題の工夫を行うことで学習意欲を喚起し、必要な学力の定着に努める。
	朝の読書の深化と読書指導の充実	朝の読書をおして、読書に親しみ、思索する態度を育てます。(図書年間貸出冊数一人当たり3冊以上) A:4冊以上 B:3冊 C:2冊 D:1冊 E:0冊	D	図書室の開館時間が不明で、利用しづらく、読書に親しもうとする姿勢を育成する指導も十分でなかった。 貸し出し冊数一人当たり:1冊	図書室情報を積極的に発信するとともに、読書会など読書に親しむ行事の工夫に努める。各教科で図書室を活用する授業に取り組みよう努める。
	教科指導力の向上	ICTの活用などにより、主体的・対話的で深い学びを積極的に取り入れ、「よく分かる」「学力を伸ばす」授業改善に取り組む。	C	総合学習(探究)ではアクティブラーニングによる成果を確認することができた。各教科では、ICTの活用を含めた授業改善に十分に取り組むことができなかった。	電子黒板等を活用した授業実践例やICTを活用した教材を収集し、全教職員で情報共有を図り、授業改善に取り組む。
各種検定の奨励	各種検定合格者61名以上、上位資格取得者5名以上を目指します。 A:61(5)名以上 B:60~50(4)名 C:49~43(3)名 D:42~35(2)名 E:34(1)名以下	C	各種検定の受験を積極的に奨励し、サポートした結果、合格者の延べ人数は目標を達成したが、上位資格の合格者数は届かなかった。合格者数:93(2)名	授業や家庭学習の充実化を図るとともに、個別指導の徹底に努め、上位資格の取得に積極的にチャレンジする環境づくりを行う。	

※評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
豊かな創造性	一人一人の進路実現の工夫	生徒一人一人に応じた適切な進路指導を行うことにより、進路希望者全員の進路実現を目指します。(国公立大学合格3名以上) A:4名以上 B:3名 C:2名 D:1名 E:0名	B	学習意欲のある生徒に対する個別指導を含め、個々のニーズに応じた進路指導を行うことができている。個別指導に対するサポート体制には改善の余地がある。 国立大学合格者:3名	進路指導体制の見直しを図り、進路情報や進路指導に関するノウハウの共有を進める。 面談等の機会を活用して、一人一人の生徒に、自身の適性を自覚させるとともに、発達段階に応じた課題を明示することなどにより、地元企業や関係諸機関と連携し、キャリア発達を促す指導にも力を入れながら、正しい職業観と勤労の精神を育成する。
	部活動の充実と活性化	部活動加入率100%を目指し、生き生きとした学校生活が送れる環境づくりに努めます。(県レベル以上の大会に出場する生徒61名以上) A:61名以上 B:60~50名 C:49~43名 D:42~35名 E:34名以下	C	コロナ禍で大会だけでなく練習試合もままならない中、熱心に活動する生徒が多い。部活動がよい居場所になっている。一方で、2・3年生の加入率が下がりつつあり、課題となっている。 県レベル以上出場生徒数:29名	部活動の精選と顧問の適正配置等に努め、生徒の主体的で対話的な活動としての部活動の活性化を目指す。 保護者や地域との連携を密にし、他校との合同練習や練習試合等の機会の確保に努める。
思いやりと自己を律する心	基本的な生活習慣の確立	基本的な生活習慣の確立に努め、各学期皆勤者61名(70%)以上を目指します。 A:61名以上 B:60~50名 C:49~43名 D:42~35名 E:34名以下	C	2学期に入り、皆勤者の割合は目標を下回らなくなった。多くの生徒は基本的な生活習慣が身に付いており、体調不良による保健室利用生徒数も昨年より減少した。	保護者への啓発を含め、連携を密にし、重要な生活習慣や規範意識の重要性について、共通認識・共通理解を深め合っていく。
	互いに認め合い、支え合う仲間づくり	挨拶の励行に努め、豊かな人間関係を育む情懷を培うとともに、規範意識を育てる教育活動を充実させます。	C	生徒会を中心とした挨拶運動により、一定の成果をあげることができた。規範意識の薄い生徒もおり、その指導に課題が残った。	全教職員が一丸となって生徒一人一人と向き合い、場に応じた声掛けを通して生徒の自己肯定感を高める指導に取り組んでいく。
郷土愛と地域貢献	特別活動の充実と連帯感の醸成	生徒の悩みを受け止める環境づくりに努めるとともに、人権尊重の意識を更に高め、人権侵害を「しない・させない・許さない」生徒100%を目指します。 A:100% B:90%以上 C:80%以上 D:79~60% E:59%以下	C	生徒の悩み等に関する情報共有が機能しており、効果的に指導に生かすことができた。無意識に他者を傷つける言動が見られ、日常生活の中で人権感覚を高め、ていくことができるような指導が必要である。	生徒が発するサインを見逃すことなく、面談等により適切な指導を行うことができるよう生徒理解研修等によるスキルアップを図るとともに、自らの大切さや他者の大切さがお互いに認められていることを生徒自身が実感できる雰囲気作りに努める。
	特別活動の充実と連帯感の醸成	学校行事や生徒会活動などの特別活動を盛んにし、愛校心や地域に貢献する心を育てます。 生徒会や各種委員会を通じてボランティア活動や地域のイベントへの参加を促し、地域が抱える課題について主体的に考える生徒の育成を目指します。	B	生徒会が中心となり、特別活動等に主体的に取り組む生徒が多見られた。生徒会が確実に育っている。	地域や関係諸機関との連携をさらに深め、地域の教育力を効果的に生かしながら活動の継続を図っていく。 SDGsの学習やボランティア活動等について、より多くの生徒の参加促進を図っていく。
改善	適切な勤務時間と職場環境の整備	業務の効率化を図り勤務時間の適正化に努めるとともに、教職員の疲労や心理的負担の軽減を図ります。	C	長時間勤務が常態化している教職員が3割を超えている。サポート体制や業務分担の見直しによる協働体制の構築が必要である。	校務分掌の整理・統合により、業務分担の適正化と明確化を図る。 若手教員の提言を学校運営に反映させ、協働体制の構築を積極的に図る。

※評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。